

静かな空

連絡先 742-2602 山口県大島郡周防大島町油宇 福田忠邦 Tel+ Fax: 0820-75-1045

岩国基地で艦載機が試験飛行 大島上空は飛行せず

井原市長当時から米軍に要望していた、基地での米艦載機の試験飛行が、やっと8月11日に実施されました。現在のホーネットより爆音が激しいスーパーホーネットで試験飛行をすとの予告でしたが、実際に来た試験飛行機は同型といわれるEA18Gグラウラーで、しかもたった1機がおだやかにタッチアンドゴーという訓練飛行を試みただけでした。厚木基地の艦載機の激しい飛行を実感することはできませんでした。観察した福田市長は「試験飛行の状況を判断材料にする考えはない」と語りました。「判断材料にならない試験飛行」をすることに、一体どれだけの意味があるのでしょうか？

<戸村良人 行動の写真集> 2016年8月11日

9時前に今津川沿い堤防道路にやってきました。10時から空母艦載機スーパーホーネットの試験飛行が始まるということでした。10時2分、試験飛行はスーパーホーネットではなく、グラウラーだったそうです。



この写真はかなり高い上空での飛行です。



10時34分 米海軍艦載機EA-18Gグラウラー電子戦機。タッチアンドゴーに入ります。



10時34分 タッチ（着地）しました。



そしてふたたびゴー（離陸）です。

周防大島町総務課が中国四国防衛局に聞くと、ふつう大島上空は計器飛行だが、試験飛行は目視飛行だろうから、大島上空は飛ばないだろうと回答。当日、椎木巧町長が文珠山頂上で試験飛行を観測しましたが、大島へは来なかったそうです（中国新聞）。厚木から艦載機59機来たら激しい爆音になるから、1機だけ、しかも大島へ来ない試験飛行は、周防大島町民には無意味でしょう。

来年1月 岩国基地に F35B を配備

防衛省が来年1月に F35B を岩国基地に配備すると通知しました。これは開発されたばかりの、滑走路からジェット噴射で真上に上昇し、横に飛行し、垂直に着陸する戦闘機で、すでにフロリダ州で事故を起こしています。瀬戸内ネットは岩国市に、この危険な戦闘機は、危険性をしっかり調査したうえで、受け入れるかどうかを決定すること、また 2020 年に米軍がオスプレイを岩国に配備するということに対して反対声明を出すことを要望しました。(以下はその記録)



垂直着陸している F35B

高田（基地政策担当部長） 8月22日、防衛・外務政務官から F35B 配備について説明があったので、騒音等による住民生活への影響、機体の安全性などについて、県知事と岩国市長連名で質問した。いま F35B は日本国内には来っていない。現地ユマ基地へ視察に行きたい。質問に回答がくれば明らかになるだろう。

「オスプレイの配備について反対の申し入れをする」ことについて、まだ米側から説明がないとの国の回答があった。オスプレイの配備もまだわからない。

瀬戸内ネット F35B の安全性の確認されていないことを岩国市は理解しているのか。今アメリカで使われている F35B は 32 機で、まだ開発途上だ。これを 16 機岩国にもってきていいのか。市民の平和と安全を守る立場にある岩国市は自力で F35B を精査すべきだ。市長がアメリカへ行くからには、きちんとした資料を提供してもらいたい。

高田 市民の安全、騒音、運用面の問題などについては県と共に国に照会をしている。国も誠意ある回答をと思う。

瀬戸内ネット 疑問点が解明されなければ、反対するのか。

高田 現時点では賛成も反対もしていない。

瀬戸内ネット そういう態度では市民の平和と安全は守れない。「市民の平和と安全を守る立場を明確する」ことがいま岩国市に問われている。

高田 回答が来てない段階で、結論的なことは言えない。

瀬戸内ネット 結論は F35B を「受け入れられる」、「受け入れられない」のどちらかだ。F35B 機が来るのは「困る」という結論になることもありうるか。

高田 市民の不安が解消されない限りは、そうした（国にたいして、F35B を持ってきては困ると言う）ことも当然あるかもしれない。

瀬戸内ネット 岩国市長は広島県、島根県にたいしても責任がある。他県まで出かけて行って、米軍機がどんな訓練をしているかをみるべきだ。

瀬戸内ネット 試験飛行をもう一度やるのか。今回の「穏やかな飛行」が今後の飛行基準になるのか。艦載機 59 機がくることはきまっているのか。部長は市民の立場と国の立場の、どちら側で考えているのか。

戸村良人 今日も文珠山上空を2機編隊で轟音飛行

2016年10月6日(木) 13:46



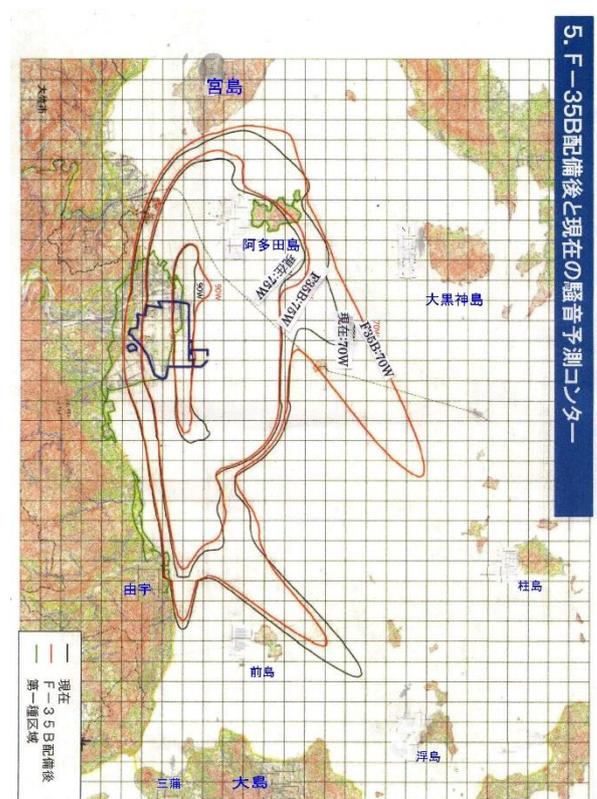
米海兵隊 F/A-18D ホーネット 戦闘攻撃機 (岩国基地) CE, 351 番機 10 番機。東の久賀方面から文珠山をめがけて飛来し、北方向へ大きく右に旋回して、先方に見える岩国基地滑走路へ向かいます。カメラマンも驚くほどの轟音でした。

現在と、F35B 移転以後の飛行コンター

山口県と岩国市が提出した質問にたいして、国は現在と F35B 移駐 (来年1月とされている) のあとの爆音の範囲を示すコンターを提示しました。2009年に示されたコンターとくらべると、三浦、浮島方面への騒音度 70W の爆音領域がかなり後退しているように見えます。三浦と浮島まで届いていた爆音指数 70W の爆音領域が、すこし縮小していますし、垂直離着陸機 F35B の爆音領域も後退しています。

しかし、今日のホーネット飛行は、あたかもこのコンターの図を無視するような飛行です。

新しく国が示したコンターは、あまりあてにならないようです。



大島郡の第二次世界大戦



安高地区戦死者墓標

春のお彼岸に墓参りして、注意して見ていると、戦死の日付けと場所がきざみこまれている、頂上がとがった戦死者墓標がたくさんありました。戦死者は英霊とよばれ、神道式の墓標に祀られたとのことです。仏教様式ではどうかとも思いましたが、私は数珠を片手に、日前部落の5カ所の墓地の、戦死者の墓標の碑文を読んで歩きました。西郷隆盛が戦死した明治10年(1877)の西南戦争

の戦死者、二百三高地戦だけで5,000人の戦死者

を出したという、明治37年(1904)の日露戦争での戦死者もありますが、大部分は支那事変と太平洋戦争の戦死者です。昭和12年(1937)以後の戦死者墓標は、片山5基、道々山6基、西正寺6基、シギョウバラ6基、浜西21基で、日前部落の戦死者墓標は44基、さらに土居部落14基、油良部落17基で、旧日良居村は75基にのぼります(浮島未詳)。安下庄地区の7つの墓地には、合計101基103名の戦死者墓標がありました。まだ他にも墓地があり、ご先祖とともに家代々の墓に納められている戦死者も少なくありません。

『橘町史』は安下庄地区について、「大東亜戦争・終戦後も含めて354人の戦死者があり、工場その他における殉難者もまた多かった」と書いています。これには、日良居(日前、土居、油良、浮島)の数は入っていません。『周防大島町誌』(大島郡旧大島町)はさらに詳しく、「日支事変・大東亜戦」の戦死者として、三蒲125、小松152、屋代139、沖浦203、合計619名という数をあげています。『久賀町史現代編』『東和町誌』には記載がありませんが、似たような数字であろうと推測されます。

墓標の多くは戦後70年の歳月で苔むして、碑文が判読しにくいのですが、「軍曹」「上等兵」などの階級、氏名、戦死の年月日、年齢につづいて、「ガダルカナルミンポーニテ戦死」「於廣西省賓陽縣崑崙関戦死」など、判明した戦死の場所が刻まれています。同じ墓標に2人の氏名が刻まれているものもあり、「昭和20年8月6日 広島原爆戦死」という碑文もありました。刻まれた年齢は大部分が20代から30代、異国の地に青春を失った人があまりにも多すぎます。

家族の墓標から離れて、人目につきやすい場所に建てられた戦死者の墓標もあります。木村家の墓地は塩宇墓地(右写真)の左隅にありますが、昭和19年マリアナ島で



戦死した長男敏郎氏(23歳)の墓標は、広い墓地のほぼ中央に毅然と聳えるように立っています(右写真)。ここなら皆さんに拝んでいただけるだろうと、両親が考えたのだそうです。親なればこそです。安高の墓地で、戦死者の墓標が県道沿いにずらりと並んでいた理由がわかりました(冒頭写真)。



1943年6月8日、伊保田沖の柱島水道で、警泊中の「戦艦陸奥」が謎の大爆発を起こして沈没し、1471人中1121人という多数の乗員(教官、予科練生を含む)が死亡・行方不明となりました。原因不明の爆発です。1970年から8年間にわたる引き揚げ作業で、遺骨・遺品・主砲などの75%が引き揚げられ、現在、町立の「陸奥記念館」に保管、展示されています。



(左写真 出身県別に遺影が展示されている)

飛行機ともども敵艦に突入する特攻隊でも、多くの青年が命を失いました。「江田島海軍兵学校」の1941年11月(太平洋戦争勃発の年)から1944年3月までの卒業生2540人の半数近い1185人が戦死、その多くが特攻隊でした。私の伯母の嫁ぎ先の甥中西達二氏は昭和18年9月卒の特攻隊員として「沖縄方面」で戦死しました。両親あての遺書に「大島郡は眼下に見て、方便山もはるかに彼方に見、たしかに機上で皆にお別れした気でいます」と書き、伯母あての遺書には「大島郡の皆様」によろしくと、伝言を求めています。



終戦まぎわに徳山沖の大津島に基地が作られた人間魚雷「回天特攻」では、海軍兵学校卒業生17名が命を失いましたが、そのうち終戦直前1945年3月卒業の7名の死者は「潜水訓練」中の事故死、うち1名は大島郡東端の「情島西方海上」での訓練中です。ちなみに回天の戦死者は87名、帖佐裕氏(「同期の桜」作詞者)、上山春平氏(京大名誉教授)なども回天特攻隊員だったそうです。(写真は大津島の人間魚雷「回天」)

大島郡西方に生まれた義父は、兵役中のことを語ることはほとんどありませんでしたが、遺した歌集に何首かの鎮魂歌があります。

妻娶り日浅き同士召されたり征きて帰らぬ友俣ぶなり
ふる里の無縁の墓に頭垂れ思いを馳する大陸の丘
三人の子息戦死の御両親柩連ねて出で給いしと
敵兵の乙女心をあわれみぬ死顔にのこる口紅のあと
「許せよ」と挙手の礼して別れ来ぬ立ちあがらんともがく軍馬に
爆弾とともに戦車に突撃の訓練うけし遠き兵の日
戦死せし兄につづきて弟の出征見送る母は面伏す

戦場の土となって帰らなかった人達だけでなく、帰らぬ友を憶いつつ、癒えぬ傷を心中深く秘めて生きた人も少なくないでしょう。

藤村英子さんは「大島郡のこの田舎でさえも空襲があつて、私の先生が文字通り木っ端微塵になったんですよ。久賀の女学校の生徒が阿弥陀寺に疎開していた。学校が海軍兵学校にとられていましたので。空襲警報が鳴ったから、数学の大浜先生が『みんな中へ入れ』と入れているところへ編隊がきて爆弾が落されたので、大浜先生は直撃を受けて木っ端微塵になったそうです」と語り、「機銃掃射」で「久賀の薬局のご夫婦が両方がやられて、片足ずつになったという」とも書いています。

学業をすてて動員された学徒の戦争もありました。久賀小学校、安下庄中学校の時代の記憶を記した山根勇さんの回想記は、岩国航空隊で飛行機を隠すための掩体壕を造り、呉海軍航空廠補給部で通信や機関銃整備、飛行機整備などに従事した、学徒動員のリアルな記録です。私の中学校時代の恩師安中士朗先生は、戦争末期の学徒動員で、人間魚雷「回天」の整備の仕事に従事しました。小松開作の吉井勝雄さんも学徒動員で、岩国の愛宕山の地下に軍用機格納庫をつくる工事に従事しました。幸運にも8月14日の岩国駅周辺の集中爆撃は免れましたが、死んだと思った父親が遺体をさがしに大島から来たそうです。

日前の大村泰さんは予科練生として岩国海軍基地に勤務、「愛宕山から基地滑走路まで朝暗いうちから零戦を突っ張って」出る仕事に従事した、8月9日に掩体壕爆撃を受け、多くの同期生が犠牲になったと書いています。周防大島高校（旧安下庄中学校）の校庭に、大村さんたちが、学徒動員で戦死した同期生9名に捧げた「友魂の碑」があります。



戦争が終わって70年。戦争を知らない人ばかりになりました。戦争の悲劇は、自分とは関係のない、どこか遠いところの昔話と思う人が多いでしょうが、日々暮らしている地域で、これだけの人が戦争で亡くなり、また被害を受けたという事を、一度は考えておく必要があると思います。「自衛隊」を「国防軍」に変えることがいいことかどうか、など議論する前に、自分の住む地域に残されている、戦争の活きた記録をしっかりと見ておくべきでしょう。

参考文献

大島町(山口県)『周防大島町誌』 1959.

大村泰著「零戦掩体壕前にぬかづく」(『岩国空襲の記録』岩国戦争体験を語り継ぐ会 1986)

橘町(山口県)『橘町史』 1983.

藤村英子著 『戦前戦後の教育に思う』 2013.

真継不二夫編『海軍特別攻撃隊の遺書』1971.

山崎良雄著 『顔施』 2005.

山根 勇著 『二分の一の力と二分の一の力で生きた学徒動員』 2010.

(日前 河井弘志)